

2018年2月11日<降誕後 第6主日礼拝> 飯川雅孝牧師

招詞：テサロニケ一5：16-22 聖書：ロマ書16章1-7、21-23節

説教：『パウロの思い出』

キリスト教はパウロがいなかったならば、現在のように世界に広まっていることはありえないと言ってもよいでしょう。また、パウロの手紙に基づくキリスト教はイエスが地上の生活で直接教えたことではない。パウロという人物に、復活したイエス・キリストが臨んで、彼の心と精神を動かしてこの世を生きさせた。そのあり方からわたしたちに伝えられるキリスト教であります。ですから、パウロが自分の生涯に出合った出来事を彼や関係する人々がどのように受け止め、その事実が彼がどのように反応したか。それが、現在のわたしたちクリスチャンに大きな影響を与えています。それはわたしたち人生で出合った出来事や先生や友人、知人との関係を見ればみなさんも納得されることと思います。

そこで、本日の説教はそのことを考えて見たいと思います。

今、お配りした地図も合わせて御覧ください。—パウロの伝道旅行と週報を説明。

さて、パウロにとってイエス・キリストに出会ったことは青天の霹靂でした。ユダヤ教熱狂主義者としてクリスチャンを迫害している神の子イエスに一番見られたくないことをしているその最中に、復活したキリストの啓示が天からあった。その場に倒れ、三日間目が見えない状況に置かれた。自己の一番の暗闇でイエスに会ったことは、逆にイスラエルの古代から神に見棄てられたと見なされた異邦人に神の救いを伝える伝道者になりなさいと責任を負わされたことであります。だから、イエスは「わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」その後の彼の伝道の生涯はまさにその通りでした。

今日のロマ書は彼の遺言と言われる最後の手紙です。自分がまだ訪問していなくてこれから行こうとしているローマの教会に、これまで自分が実際に牧会者としていろいろな教会を回って人々の生活に入り込み、信仰の糧を得た。その真髓の総括を伝える手紙であります。今日の箇所は15章までそれを述べた後、今はローマにいるけれども、これまでどこかの教会と一緒に喜びや苦しみを共にした人々への感謝を伝え、また他方では自分の伝道には足を引っ張った人の名前も伝えています。彼の人間臭さも感じさせますが、同時に伝道の持つ真実を伝えております。

「キリスト・イエスに結ばれてわたしの協力者となっている、**プリスカとアキラ**によろしく。16:4 命がけでわたしの命を守ってくれたこの人たちに、わたしだけでなく、異邦人のすべての教会が感謝しています。」他方で「あなたがたの学んだ教えに反して、不和やつまずきをもたらす人々を警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。」との知恵も語ります。

また、今私はコリントからこの手紙を書いているが、ここには一緒にいる「わたしの協力者**テモテ**、また同胞の**ルキオ**、**ヤソン**、**ソシパトロ**があなたがたによろしくと言っています。」とも、ローマとコリントと離れていますが、パウロの心には迫害を共に耐えた真実な友への篤い思いが感じられます。

この人たちの中で、パウロとともに具体的な活動を取ったことが聖書に載っているヤソン、テモテ、プリスカ（プリスキア）とアキラに付いて見てみましょう。

第二伝道旅行の時、パウロとシラスはフィリピに行き、リディアという女性に洗礼を授けますが、占いの女から悪い霊を追い出したことで金儲けができなくなったその主人の恨みを買って牢屋に入れられます。しかし、神が地震を起こして彼らを助けると、

次のテサロニケに行きます。当時ディアスポラに散らされた一とってローマ世界の各都市にユダヤ人のグループがありました。ここでもその一部のユダヤ人以外にもギリシャ人もパウロの伝える復活したキリストを信じる人がでました。するとパウロに反対するユダヤ人がそれを妬んで暴動を起こし、パウロを匿ったヤソンの家を襲い、引き出します。彼がキリストを信ずることを禁ずるローマの勅令に違反しているとの廉で罰金刑に処します。ヤソンの行動には伝道ゆえに迫害を受けるパウロと苦難を共にする信仰の友の姿を彷彿とさせます。

次にテモテは伝道者としての主張の強いパウロが片腕として最も信頼する若者でした。第一次伝道旅行の時、リストラで会い、その資質が見込まれます。第2回伝道旅行の時、故郷から同労者として当時20歳前後の彼を連れて行きます。テサロニケの次のベレアに行った時、テサロニケからパウロを妬むユダヤ人が執念深く追っかけてきました。兄弟たちは危険を感じてパウロを次のアテネに逃れさせます。しかし、そこでの伝道はシラスとこの若いテモテが危険の中でパウロの代理として残すのです。第三旅行では小アジアのエフェソから、マケドニアやコリントにパウロの代理人として派遣しております。この時、コリントIの手紙では「4:16・・・わたしに倣う者になりなさい。4:17 テモテをそちらに遣わしたのは、このことのためです。彼は、わたしの愛する子で、主において忠実な者であり、至るところすべての教会でわたしが教えているとおりに、キリスト・イエスに結ばれたわたしの生き方を、あなたがたに思い起こさせることでしょう。」テモテはパウロに代ってキリストの生き方を伝えるほどに指導者として力量を持っている。パウロはそれを信じている。つまり迫害の中においてもキリストにある恵みを伝える強い信仰の持ち主であったことを証しているのです。

次にプリスカとアキラです。エルサレム会議の後、パウロの異邦人伝道の力がローマ世界に広まったので、ユダヤ人たちとの争いが起こります。首都ローマではそれが激しかったので、皇帝は保守的ユダヤ教の肩をもってキリスト教を追い出します。使徒言行録はそのことを次のように伝えます。

18:1（第二伝道旅行の時、パウロはアテネでの伝道に失敗し、）その後そこを去ってコリントへ行った。18:2 ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキアに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、18:3 職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。・・・18:11 パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。

そして、先ほどロマ書で見たようにその活動は「命がけでわたしの命を守ってくれたこの人たちに」と言っています。彼らは第二伝道旅行が終わった時はパウロに同行してエフェソにも行きました。パウロがシリアに戻ったが、彼らはそこにとどまっていた。その時、雄弁家のアポロが来たがヨハネの洗礼しか知らなかったので、イエスの聖霊による洗礼を伝え、コリントに紹介状を書いて送り出した。パウロは最後は彼らがローマにもどったことを伝えています。

パウロの伝道はその生涯を通してどうだったのでしょうか。わたしたちが想像できないような壮絶な人生を語ります。しかし、パウロのような世界を支配する伝道者にはそれ以上の大きな恵みと知恵が与えられたことを語ります。(第二コリント12章)

自分は「気が変になったように言うがキリストに仕える者である。・・投獄され、鞭打たれ、死ぬような目に遭った。ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けた、石を投げつけられた、難船、川の難、盗賊の難、同胞からの難、・偽の兄弟の難に遭い、眠らず飢え渴き、寒さに凍え、裸、迫るやっかい事、教会の心配事があります。先ほど見た地図の示す土地や海の上でこのような苦しみに遭ったと思うと心が痛みます。

しかし、わたしは、キリストに結ばれていた、十四年前、第三の天にまで引き上げられた、人が口にすることを許されない、言い表しえない言葉を耳にした、あの啓示された事がありにもすばらしかった。しかし、思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。12:8 この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。とあります。このとげとは何でしょうか。パウロはロマ書で聖なる律法を与えられ自分は死んだと語ります。実存の深淵を抱えて生涯苦しんだパウロの魂は常に死の痛みを負ったと考えざるを得ません。しかし、そのパウロをキリストは己が十字架と復活によって常に祝福し、励ましたのであります。

12:9 すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」だから弱さは恵みである。

本日話した、シラス、プリスカラとアキラ、ヤソン、テモテもパウロのこのキリストに従う苦しみを共にし、また喜びに満たされたでしょう。キリストにある友としてその喜びは何倍にも強まったと信ずるのであります。

わたしたちも、キリスト者としての道を歩む時、この世との戦いに出遭うのですから当然困難に出会います。わたしが若い頃いた教会のとても敬虔なご婦人の司会の祈りを覚えております。「心を同じくする友とあなたを讃美する喜びに招かれ感謝いたします。」との祈りでした。その方はこの間『野の花』で紹介した、横浜の波止場で食品検査をした時、違法をチェックしたために業者にワイヤーで体を巻き上げらえた農林省の技官の奥さんでした。

キリストの友にはお互いに生涯に渡る心からの喜びが与えられる。そのことを思って信仰に励みたい。そう思います。